

# 児童・生徒のボランティア活動等社会奉仕・体験活動等の推進に向けた研究

- 豊かな人間性や社会性を育むことを目指した新たな取組に向けて（実践報告） -

江原美明<sup>1</sup> 附柴 聡<sup>2</sup>

次代を担う児童・生徒に、豊かな人間性や社会性を育み、よりよく「生きる」ことを学ぶ環境を整えることは、若者たちとともに成長する社会全体にとって重要な課題である。本研究では、この課題に取り組む一方策として推進が求められている、ボランティア活動等社会奉仕・体験活動等の在り方と具体的な取組の方向について、小・中学校での活動実践に基づき、その方向を探った。

## はじめに

平成13年に一部改正が行われた学校教育法（第18条の2）で、「児童の体験的な学習活動、特にボランティア活動など社会奉仕体験活動、自然体験活動その他の体験活動」の充実が求められている。この法改正は、小学校から高等学校の各学校種で、「生きる力」の育成を中心とした教育目標達成のためには、体験活動が不可欠であるとの認識に立ったものである。

神奈川県でも、「神奈川力構想・プロジェクト51」（平成16年3月）の「未来を担う人づくり」において、社会の構成員としての豊かな人間性を身に付けることができるよう、奉仕活動・体験活動の推進が掲げられている。

ボランティア活動が「自由意志」による社会貢献と自己実現という意味合いを含む一方、社会奉仕体験活動は、社会の一員として社会に「奉仕する」側面が強調される。しかし、いずれの場合にも、こうした体験活動が育む「豊かな人間性」や「社会性」の涵養は、教育において最も重要な課題の一つである。

## 研究の目的

本研究は、小学校2名、中学校2名の調査研究協力員とともに行った実践研究である。本稿では、昨年度に作成した活動プランを基に、各協力員が実践した活動のプロセスを、子どもたちの学びの記録と共に報告する。

学校内外における多様な体験活動について、各調査研究協力員が作成した活動プランの実践と検証を行い、各学校での取組の参考となることを目指した。

日々児童・生徒と接している調査研究協力員からは、

- ・人と関われない子どもたちが増えており、人間関係のトラブルで悩む子が多い。

- ・地域の中での保護者同士の関係が希薄になっている。

- ・自己効力感がなく、閉塞感を感じている子どもが多い。

などが指摘され、「人と関わり合う力」、「他を思いやる心」をいかに育成するか、「心の絆」づくりをどうしたら良いかが緊急課題であるといえる。

この危機意識は、平成16年10月、文部科学省がまとめた「児童生徒の問題行動対策重点プログラム」が体験活動の充実を求めている趣旨にも通じる。

こうした現状認識や危機意識を持ちつつ、本研究では、現場の実情に即した実践を次の四つの視点から行った。

- 1 地域や他校種との連携（小学校）  
ボランティア活動における校種間連携、地域との連携
- 2 全体・年間計画をいかした実践（小学校）  
「総合的な学習の時間」における体験活動とボランティア活動の係わり
- 3 ボランティア活動の日常化（中学校）  
初めて学校にボランティア活動を導入する際のきっかけづくり
- 4 活動の継続・発展のための工夫（中学校）  
担当者間の協力体制や共通理解を図るための情報共有

## 研究の内容

調査研究協力員所属校4校で行われた平成17年度の実践研究の内容と成果・今後の課題の概要は、次のとおりである。

1 人材育成課 研修指導主事

2 人材育成課 研修指導主事

1 高等学校や地域との連携を図る小学校での実践  
- A校の「フラワーロード計画」 -

A校では、平成16年度より「総合的な学習の時間」を使った、リサイクルや地域周辺の環境美化活動などの活動を計画してきた。特に、本年度は、高等学校や地域との連携を図りながらフラワーロード計画（花いっぱい運動）を進めていくことを重点とした。連携団体は、「学校へ行こう週間」（10月）に活動連携を申し出た高等学校と、以前から協力を申し出ていた地域団体の二つである。小学校の担当者が全体計画を立て、保護者にも参加を呼びかけ、活動が始まった（写真1・2）。



写真1・2 フラワーロード計画

300名あまりの小学生、高校生、地域活動団体の方、保護者が一列になり、用意された700本の苗植えを行った。高校生が小学生に丁寧に植え方を教えたり、植木の根元を掘ってあげたりしている姿は印象的だった。

小・高・地域団体の合同活動を通して、子どもたちのボランティア活動に対する意識が、校外へと広がった。地域ミニコミ誌、ケーブルテレビ等に取り上げられたことで、子どもたちの今後の活動の励みとなり、地域へも活動内容を発信できた。来年度以降も高等学校、地域団体とは連携していく方向で合意できた、などの成果を得た。

今後の課題としては、児童にさらなる動機付けを図ること、他学年や学区内の中学校へと活動の輪を広げること、活動の評価や認め合い活動を行うこと等が挙げられる。

次に、活動後の小学生、高校生、地域団体の方、それぞれの感想文を挙げる。

（児童の感想）

きょう、フラワーロードけいかくにさんかしました。おにいさんたちといっしょに、四かいおはなをうえました。大きくなるといいなとおもいます。むしもいっぱいいました。

（高校生の感想）

先日は、花植えに参加し小学生との交流もでき、とても楽しい時間を過ごすことができました。また、小学生はとても積極的に参加していて、感心させられました。A校の皆さんとはめったに関わることがないので、今回の花植えは私たちにとって貴重な体験となりました。今、地球温暖化が進んでいます。花植えをして自然を増やしたことは小さなことです。が、環境問題に貢献できたと感じました。

（地域団体の方の感想）

高校生と小学生の交流は実に微笑ましいものでした。小学生がお兄ちゃん、お姉ちゃんにまわりつき、（中略）お兄ちゃんお姉ちゃんがすっかり小学生の時代に戻ったように優しく面倒を見ていました。このような運動は、青少年の非行化防止にも極めて有効ではないかと考えました。

2 地域との連携や全体・年間計画をいかした小学校での実践

- B校の総合学習「米作りにチャレンジ」 -

B校では、「総合的な学習の時間」において、学校としての全体計画や学年計画を作成し、各教科等の学習内容との関連も図りながら、学習活動を進めている。本年度は、5年生で「米作りにチャレンジ」というタイトルで体験活動に取り組んだ。まず、社会での「お米マップ作り」や道徳での「緑よ、よみがえれ」の学習から始めて、稲の育て方を調べ、米作りの計画を立てた。その後、水路作り、しろかき、田植え（写真3）、草取り（写真4）、稲刈り、脱穀、もみすりと進め、最後に収穫できた喜びを祝い、お世話になった方に感謝する「お米パーティー」を開くという流れを考えた。



写真3・4 米作りにチャレンジ

また、活動の中には、幾つか子どもの自発的な参加を促す場面を設定した。次の文は、脱穀した米を天日干しする際に、自主的に手伝いをした子どもの文である。

小さなボランティア

今日、中休みを使って、米をほした。10kg位の米袋を一つずつ運んで、わたしが持った数は、合計六つくらいだった。昼休みは、米を袋の中にもどして、屋上の階段の所に置いた。5時間目の前に、先生が「手伝ってくれた人です。拍手しましょう。これも小さなボランティアですね。」と言って、わたしはてれた。

（子どもの書いた日記より）

活動後の感想から、体験活動の楽しさだけでなく、人と協力することの大切さ、人との絆への気付きが感じられたことは、成果と考えられる。

今後の課題としては、今年行った「米作り実行委員」の仕事やいくつかのボランティアを、さらに計画的に設定し、参加する児童を認めていけるような取組をしていくこと、自己評価、友だち同士での相互評価に加え、お世話になった地域の方から、見て良かった点を中心に活動を評価してもらい、子

どもたちに返していくこと、などが挙げられる。

次に、活動を終えての児童の振り返りを挙げる。

(子どもの振り返り)

残念だったのは、米がせっかくとれたのに、けっこうたくさん米が、地面の上に落ちてしまったことだった。テレビで農家の人が、「わが子のように」と言っていたけれど、こんな気持ちなんだなと思った。今日の稲刈りは、やりがいがあった。初めての経験で、自分のためにもなっているいい経験になった。みんなで協力してできたのでよかった。また、こういうことが体験できるんならやりたいと思った。

「総合的な学習の時間」では、子どもたちが主体的に学ぶ課題解決学習が求められている。その点にも留意して活動を行うことが重要である。

### 3 ボランティアの日常化を目指した中学校での実践 - C校の「ボランティア同好会発足」 -

C校では、これまで生徒会本部中心の募金活動や委員会によるプルトップ集めなどは実施していたものの、生徒が自主的に取り組むボランティア活動はあまりなかった。だが、市内の落書き消し活動や夏休みに行く校内整備活動に多くの参加があることから、生徒たちのボランティア活動に対する関心は決して低いものではないと言える。また、学校としてもボランティア活動を強化したいという考えであった。そこで、ボランティア活動の初めの一步として「同好会」を立ち上げた。その際、少ない人数でも行うことができ、

ボランティア活動に一生懸命に取り組んでいる生徒をきちんと評価でき、さらに異年齢集団で行うことを活動の重点とした。

まず、昇降口掃除を自主的に行っていた3年2名を発足メンバーとして、職員の同意も得て、ボランティア同好会のスタートとなった。活動内容は、依頼を受けたこと以外は、全て校内でのボランティア活動に限ることとした。具体的な取組としては、第1表にある活動である。活動は次第に軌道に乗り、年明け以降には週の初めに活動内容の確認をすることになった。常に自ら仕事を見つけていくことを大切にして活動していく方針である。

今後の課題としては、教員の指導時間をいかに生み出すか、どうやって生徒たちだけで自主的に活動できる状態にするか等が挙げられる。自分の存在や働きが他の人の役に立っているという実感が、同好会員の励



写真5・6 ボランティア同好会の生徒たち

みになっているようである。今の生徒たちに一番必要な実感の一つは、このような有用感であると考えられる。一人でも多くの生徒にその感覚を味わってほしいと願い、今後も活動を継続していく予定である。

第1表 同好会の主な活動内容

月	活動内容 ( )内はその月に加入した会員数
9	同好会発足 (3年2名) 最終下校時の昇降口清掃
10	最終下校時の昇降口清掃、会員募集のビラ・ポスター作製
11	最終下校時の昇降口掃除、清掃用具の修理 PTAバザー模擬店の手伝い、壁紙修理講習会 (2年4名、1年4名)
12	最終下校時の昇降口掃除(写真5)、清掃用具の修理(写真6) 出前合唱に3名が参加

次に、同好会活動に参加した生徒の声を一つ紹介する。

(同好会2年生の感想文)

自分はボランティアと聞くと、ゴミ拾いをしたり、行事の手伝いをしたりといろいろなお手伝い関係をやることだと思っていました。しかし、学校でボランティアをやっていくにつれて、「自分たちで活動内容を決め、その活動を進んでやることだ」と思い、いろいろと辺りが見えてきました。例えば、掃除をしているときに先輩や後輩といろいろな話ができたり、学校が今どんな状態にあるのかがよくわかったりと、とても楽しいものになってきました。これからも楽しいことが、このボランティア活動で見つかると思います。

### 4 活動を継続・発展させるための中学校での実践

- D校の「体験活動講座引継ぎシート」作成 -

D校では、「総合的な学習の時間」は、1年次、2年次で体験的な講座中心の学習に取り組み、その中で見つけた課題に、3年次に個人別課題解決学習として取り組む形式をとっている。1、2年次の体験的な講座中心の学習は、福祉分野、環境分野、国際分野など選択範囲が広く、そのため外部講師を多数依頼している。

実施に当たり、担当の最大の悩みと課題は、この外部講師や講師の所属団体との渉外活動である。学年職員が講座担当に当たるため、毎年講座担当者が変わる。そのため、前年度の反省なども含めた情報がうまく引き継げずトラブルも起こる。

そこで、渉外活動の引継ぎや情報・資料の保存をスムーズにし、トラブルを防げるよう、体験活動の引継ぎシートづくりに取り組んだ(第2表)。

シートには、各項目への必要事項の記載だけでなく、次年度担当の参考になりそうな事例を、表中の

連絡先からアドバイスまでの全ての項目に、注釈として付記した。例えば、2の連絡先には「活動の体験先とその体験プログラムの相談先が違う場合がある。地域環境学習の分野で水道記念館施設見学を行っているが、相談先が県企業庁サービス協会であり、初年度は渉外活動が一時混乱した」などと付記した。また6の企画内容には「プロジェクトなどの視聴覚機材が講座ごとに必要な場合、他校から借りるなどの準備が必要な時もある。また会場教室も『民族舞踊ができる広い教室』、『盲導犬のデモンストレーションのできる教室』などの講師側の要望をよく確認しておくことが大切である」などと記載した。

第2表 体験活動講座引継ぎシート項目

1 学校名	学校名を書く。
2 連携先	講師名・所属団体名と連絡先・連絡方法を書く。
3 連携のきっかけ	どのようなきっかけで体験講座の依頼先として選定し、引き受けてもらえたかを書く。
4 担当者	校内の担当者を記載する。
5 費用・予算	経費についてその財源も含めて書く。
6 企画内容	時程、指導案のようなもの、必要な機材、会場等を書く。
7 広報	イベント的な要素の強い体験学習について、広報のやり方を書く。
8 連携の実際	講師打ち合わせなどの課題を書く。
9 苦労した点	その体験学習を実施して苦労したことを書く。
10 アドバイス	同様の活動を担当する職員へのアドバイスを書く。

しっかりと引き継ぎにより渉外の労力と時間を減らすことは、教員の負担を軽減し、活動の継続を図るためには有効である。今後は、県内各校で取り組んだ体験学習についての情報を、こうしたシートに入力し、共有資料として保存・管理していけば、県内体験学習担当教員にとって参考となる情報集ができるのではないかと考える。

#### 研究のまとめ

研究の過程で、助言者である長沼豊先生から、体験活動においては、計画(Plan) 実践(Action) 振り返り(Reflection) 認め合い(Celebration) のプロセスが大切であるとの指摘をいただいた。体験活動の成果を皆で認め合うことにより、次の活動へとつながるのである。

実践から得られた成果は、

実践1 (A小学校) : 小学生・高校生・地域の人々が、共に学び成果を認め合うことで、絆を深めた。

実践2 (B小学校) : さりげない子どもの自主的な活動を褒めることが、児童の新たな気付きと学びに結びついた。

実践3 (C中学校) : 身の回りの小さな課題からボランティア活動を進めることが、生徒の自発的問題発見能力を育てた。

実践4 (D中学校) : 実践の振り返りを記録し整理する工夫が、教員間の情報共有に役立った。ということであった。

おわりに

「生きる力」の育成を目指して創設された「総合的な学習の時間」の効果として、工藤(2001)は、「抽象化断片化された知識に体験に裏付けられた具体性・現実性を与える」ことを挙げている。この知識と体験の結びつきは、体験学習の中で得られる人と人とのネットワークによって、心の通った、より確かなものになると考える。

今後の課題は、小学校の体験活動で育まれた力が中学校・高等学校でどう伸ばされていくのか、またその成果をどう評価するのか、という点である。

地域社会、保護者、異なる学校種の教員が協力した体験活動の一層の広がりと共に、カリキュラムの連続性や、体験活動の評価へと踏み込んだ研究が進められることを期待している。

最後に、本研究の助言者として1年間温かく御指導いただいた長沼豊先生を始め、研究に際して御協力いただいた関係者各位に深く感謝する。

[ 調査研究協力員 ]

茅ヶ崎市立円蔵小学校	甲地 治男
秦野市立南小学校	山口 善弘
茅ヶ崎市立円蔵中学校	荒川 融
海老名市立有馬中学校	関口 博文

[ 助言者 ]

学習院大学	長沼 豊
-------	------

#### 引用文献

工藤文三 2001 「総合的な学習の時間の基本的性格とカリキュラム開発に向けて」(池田幸也・長沼豊 編著 『ボランティア学習 総合的な学習の時間のすすめ方』第1編) 清水書院 pp.12-21

#### 参考文献

長沼豊編著 1999 『中学校のボランティア活動への道』 明治図書  
 長沼豊 2003 『市民教育とは何か』 ひつじ市民新書  
 宮崎猛編著 2002 『必ず成功する ボランティア・奉仕活動オール実践ガイド やれば意識は変わる!』 明治図書